

佐賀市 58 歴史探訪

はがくれ さかなつ 「葉隠」に出てくる魚釣りのいたずら

山本常朝が口述した『葉隠』といえ、戦国の気風を色濃く残す武骨な「武士道の本」として有名ですが、中にはほほえましいエピソードも出てきます。

佐賀藩初代藩主鍋島勝茂公の時代のこととして「聞書第七」に、小姓(※1)がやった釣りのいたずらの話がかかれていいます。「大胆なわらべ」として評判が高かった小姓の中野数馬ですが、かなりの腕白少年でした。

ある時、勝茂公が数馬に腰を揉ませていました。そのうちに勝茂公がウトウトと寝入ってしまうと、数馬は部屋を抜け出し、納戸方(※2)で御用だといって糸と針を受け取ります。数馬は針を曲げて釣針をつくり、糸を結んでお庭の池で魚釣りを始めました。そのうち、大きなフナが掛かりましたが、フナが跳ねた弾みで糸が外れて、部屋の中に飛び込み、勝茂公の顔にフナが当たりました。驚いて勝茂公が目を開くと、部屋の中で大きなフナが跳ね回っています。

勝茂公は「さてはあやつの仕業」と数馬を呼ぶが返事がありません。「どこに隠れたか」と庭に下りると、数馬は縁の下から「ワン」と一声鳴いて逃げていきました。

後に家老となる中野数馬が、年少のころから相当に胆が太かったという逸話です。この舞台は佐賀城内であったと思われます。どの御殿であったのかは分かりませんが、ひょっとすると創建期の本丸御殿が舞台となったのかも知れません。

また、この逸話は、諸藩の遊びの釣りに関する記録としては、最も古いものの一つだということです。

(※1) 藩主の身边で雑用を勤める役
(※2) 藩主の衣服や調度類を取り扱う役

一口メモ

山本常朝の『葉隠』の口述は、宝永七(1710)年に常朝の隠居所があった金立町黒土原で始まり、享保元(1716)年に常朝終焉の地となった大小隈で終わりました。黒土原には「大乗妙典一千部」石塔と「常朝先生垂訓碑」が残っていて、周辺一帯は「葉隠発祥の地」として佐賀市史跡に指定されています。



▲常朝先生垂訓碑

